

食 後

水野 仙

薄目に見えたランプの光りが、雨戸をひいてからは、一閑張りの茶ぶだいの上に、さも所を得たやうな落着きを見せた。鼓形なそのニツケルの臺の下に、ふちの赤い紙笠の光りの中に包み集められたやうに、夕餉のものゝ残りが、皿小鉢に各々の居を守つて、靜に照らし出されて居る。その外れにかけて居た肘を解いて、にぢりよりざまに長火鉢を挟んで若い夫の顔に見入つた若い妻は、折々舌に鳴るつま楊子の口つきを、もの言ひたげのもの問はれただけの目をして凝乎と見守つた。またその新聞に落した瞳のかすかな動きを見逃さず追つて行つて、午前を目を通した三面の、あの邊この邊と胸に見積つても見る。だがその見積りの欄が盡きても、夫の目は猶新聞を離れないのを見ると、小さな失望がどこやらに不満の氣を波たゝせて来る。

「あア片づけて來ませう」と暫くしてからつまらなさうに言つた。けれども滿腹の懶さに強いては立たうともしないで居る。そして少しもその言葉に反響のなかつた張合ひなさから、立たうと思つた心も失せて、猶飽かず夫の顔を見瞞めるのであつた。

黄金を着た二人の天使が、重さうに抱へ持つて居る小さな置時計が、茶棚の上にさゞめくやうな音を刻んで居る。それが折々或る秘密をさゝやかうとて聲をひそめるやうにも聞きなされる程、郊外の夜はまだ宵ながらも靜かであつた。その靜かさに喰ひ入られた心はこのまゝ言葉もなく二人居るのに堪へられなくなつて、

「ね」となんととはなくも、話の緒を手繰らずには居られなくなつた。

「ねつてば！」と體を揺つて焦れ氣味に顔を覗かうとした途端、生えかけた口髭のあたりからゆるんで、笑顔になつた顔が、

「なんだい」とこちらを向いたので、いきなりその胸に縋りつきたいやうな心を押へて、

「今日お留守に眞哉さんがいらしてよ、あなたによろしくつて、相變らず元氣なことばかり言つて居た」

男は益々その掌に力を籠めて。

「相撲を取ったら私負けるか知ら」と女は甘へるやうに突如としてかう言つた。

「きまつてるさ！」

「嘘！私負けないわ必と」

「馬鹿いつてらア、そんなちつぽけな體をして」

「いくら小さいだつて力があるわ」

「馬鹿だね、男が女に負けて堪るもんかい」

「どうせ馬鹿ですわ」

「そら／＼初つた／＼ハ、ハ、ハ、それぢやア論より證據だ、一つやつて見よう」

「いや私」

「なぜ？」

「なぜでも」

「やアい、負けさうなもんだから」

「嘘よ、嘘よ、いゝわそれぢや負けないわ負けるもんですか」と女は弾かれたやうに立ち上つた。

「危い、その茶ぶだいをもつとそちらへやり給へ」

ほつほつと揺れて、疊をずつて行く一閑張りの上にランプは瞬いた。

「さア」

「よしつ」

二つの體が組んで、右に揺れ、左に傾き、危く後に倒されさうになつては、うんとこたへてまた前にのめりさうになつて居たが、やがて譯もなく女の體は横だふれに倒された。

「どうだい」

「負けないわ」

「強情な女だなア、負けても負けないつて法があるもんか」

「だつて負けないわ」

「よし、それぢやも一度投げてやる」

「……………」

「……………」

「……………」

「眼鏡がこわれる、お取んなさい」

「……………」

「負けるもんですか！」

「ハ、ハ、ハ、」

「負けるもんですか！」

「……………こうれでもか……………」

「……………あゝつ」

「そら今度は降参したらう」

「負けないわ……………負けない、負けない」

「馬鹿だね」と男は笑ひ笑ひ手を外して、凝乎と足許に横はつた女を見下した。ゆるんだ懷に波打つて見える息を制しがてに、傾いた丸髻を疊に置いて、

「負けない、負けない、負けないア……………」と言ひ續けて居る。頬にのぼつた血の色に見ても、激した感情に女がだん／＼ヒステリックになつて居るのが知れた。

山のやうな息が離れ／＼に二つの胸に打つた。間をおけば間をおくだけ、その息の高まるやうに覺えて、怪しく兩肢の慄へを男は覺えた時、

「負けない！」と言ひさま女はかはと起つて兩手を男の背に廻した。けれども衰えた力に踏み應へる間も少く、どうと諸共に倒れるのであつた。

「……………」

「……………」

暫くは動かぬ體と體に、胸ばかりが烈しく波を打つた。ふと女の顔にあたゝかき濕りを覺えると、風を起すやうな鼻息がその耳もとを掠めるのであつた。衣と衣を通す肌のあたゝかみを、ほのかに意識しつゝ女は再び

「負けない！」と聲低く叫んだ。

— 完 —

底本…「青鞥」明治四十五年二月

テキスト入力…小林 徹

公開…平成二十九年六月十七日

改訂版公開…平成二十九年七月十六日